

コレクション展

内藤 礼

すべて動物は、世界の内にちょうど水の中に水があるように存在している 2022

内藤礼（1961- ）は、「地上の生はそれ自体で祝福であるのか」という問いをテーマに1980年代から国内外で作品を発表し、高い評価を受けています。

2009年11月から翌年1月にかけて、ジョルジュ・バタイユ『宗教の理論』（湯浅博雄訳）の一節から採られた「すべて動物は、世界の内にちょうど水の中に水があるように存在している」と題する内藤の個展が、当時の鎌倉館（現・鎌倉文華館 鶴岡ミュージアム）で行われました。建築家・坂倉準三（1901-1969）が「内部に立って外部の自然との調和あるつながりを感じる空間」を念頭に置いて設計したモダニズム建築の傑作（2020年重要文化財登録）において、内藤は展示室の内外にインスタレーションを配し、空間全体を作品の場へと変容させます。池にせり出すテラスの天井から水面上に吊り下げられた透明ビーズが懸垂曲線を描く《恩寵》は、展覧会後に当館へ収蔵され、常設作品となりました。

2016年の鎌倉館閉館に伴い、イサム・ノグチ（1904-1988）の《こけし》をはじめとする常設作品を葉山館に移設した当館は、《恩寵》についても葉山での展示方法を作家に相談しました。以来、一色海岸と三ヶ岡山に臨む葉山館の空間と自然を受けとめながら、内藤は作品の在り方について検討を重ねてきたのです。

本展は、《恩寵》とともに2009年の個展の記憶を有する作品、そして近年の思索を反映した作品により、内藤礼が新たな「すべて動物は、世界の内にちょうど水の中に水があるように存在している」を葉山に生み出すものです。鎌倉館での展示風景を記憶する方も、初めて内藤礼の作品空間を体験する方も、一人ひとりが光の移ろいや空気のゆらぎ、重力や張力といった自然の現象に満ちた「地上の生」について何かを感じ、それらと「生の外」にある存在や時間との連続性や循環性、すなわち生と死がともに生起し、多くのものたちと世界の内に存在することへの内藤礼の追究に思いをめぐらせていただければ幸いです。

神奈川県立近代美術館

この生を衝き動かしている
逝ったものたちの生をかんじる

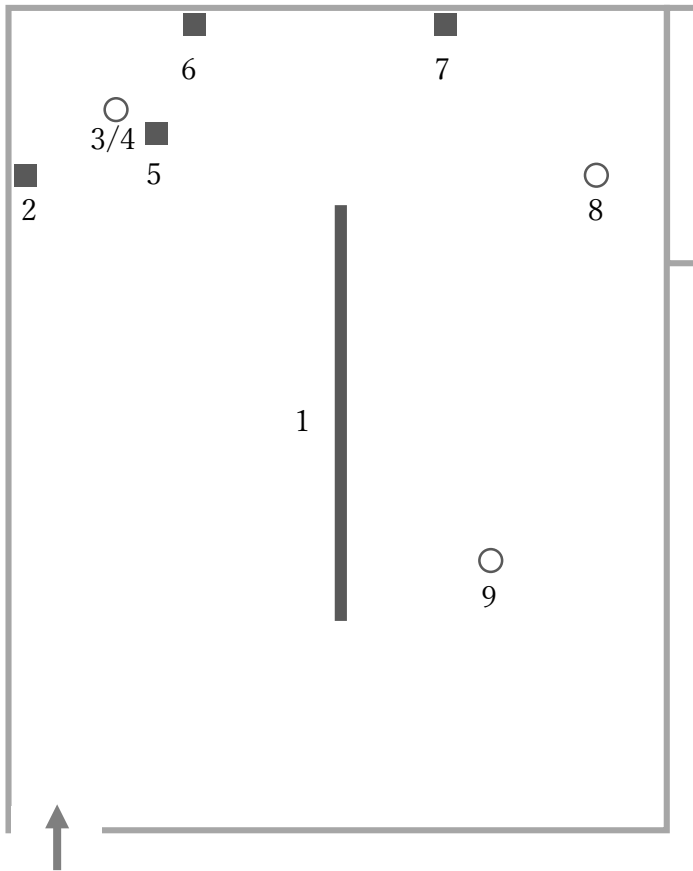
生きて

それから逝こうとおもう

内藤 礼

二〇二二・一〇

出品リスト



- 壁面または空中に設置された作品
- 床上に設置された作品

[凡例]

配置・出品No.
 タイトル
 制作年 a/b (c-)[d] * 素材
 サイズ

* 制作年の併記は以下を表す。

- a: 同一作品としての初出年
- b: 本展での発表を表す
- c: 同シリーズの初出年
- d: 鎌倉館での個展（2009）で発表した作品が元となっていることを表す

1
 恩寵
 2009/2022 ビーズ、テグス
 直径0.15 cm, 幅900×高560 cm

2
 世界に秘密を送り返す
 2022 鏡
 縦7.5×横7.5×厚0.5 cm

3
 地上はどんなところだったか（母型）
 2022 [2009] プリント布、板、塗料
 奥行14.6×幅16.1×高6.6 cm

4
 帽子
 2014-2018頃 毛糸、糸
 直径1.7×高1.8 cm

5
 風船
 2022 (2009-) 空気、風船、糸
 直径約14×高約18 cm, 全高約512 cm

6
 精霊（わたしのそばにいてください）
 2009/2022 ボタン
 各直径2.3×厚0.2 cm（2点組）

7
 恩寵
 2022 (2020-)[2009] プリント布
 縦8×横7.8 cm

8
 母型
 2022 [2009] 水、ガラス瓶
 直径6.7×高6.6; 直径7.5×高11.9 cm, 全高約18.5 cm
 (2点組)

9
 世界に秘密を送り返す
 2022 (2020-) 鏡
 各 奥行7.5×幅7.5×高0.5 cm, 全高1 cm（2点組）

No. 1: 当館蔵 / Nos. 2-9: 当館寄託（作家蔵）

〔展示作品解説〕

内藤礼は、しばしば同じ言葉をタイトルとして複数の作品に与えている。そうして、それらの言葉を依り代にした思索の軌跡、時間とともに深化した意味や解釈の展開を示してきた。彼女が用いる素材や色彩、形状などの選択にも、同様の方法論がみてとれる。

本展は、鎌倉館で2009年に行われた個展での発表作品（当館に所蔵された作品）を起点とし、当時の素材や記憶を召喚しながら、「再現」や「再制作」にとどまらない、同時に単純な「新作」でもない、全体で一つの作品というべき空間を構成している。もとより展覧会とは現象（いま・ここ）としての体験をひらく場だが、鎌倉からの由来と葉山の空間とに関わる、いわば二重の要素をもつ作品が多いことから、個々の解説を付した。

1

恩寵

2009/2022

ビーズ、テグス

直径 0.15 cm、幅 900×高 560 cm

2009年の個展で鎌倉館（本館）1階のテラスに発表され、その後収蔵品として常設された作品。鶴岡八幡宮境内の平家池にせり出すピロティ構造（柱だけで空間を支える建築意匠）の天井から一連の透明ガラスビーズが水面上に吊り下げられ、重力によって懸垂曲線を描く。風や光が変化する半屋外の空間において現象と物質は一体化し、それらを総体として体験することで、個々の要素が改めて感受される作品の場を生み出していた。

葉山館では、窓外の水景と中庭越しの山景が鎌倉の記憶をひらく展示室3b（天井高6m）が選ばれた。ビーズの部分（幅550×高260cm）は、鎌倉館のテラス（天井高3m）でのサイズを当時のままに移している。

一方で、ビーズを通したテグスの部分を展示空間の上部に露出させたことで、「存在するが見えていなかったもの／見えないけれど存在しているもの」と内藤が感じ、考え

続けている「生の外」が作品に表現として加わった。テグスは、生の表象としてのビーズの中心を貫き、その存在を支える概念的な構成要素として可視化されている。

2

世界に秘密を送り返す

2022

鏡

縦 7.5×横 7.5×厚 0.5 cm

外界の現象を映す鏡のモチーフは、八角形や円形の鏡を用いた作品だけでなく、フレームに嵌めた窓状の板ガラス、水滴やそれらの集積としての水面など、「透過」と「反射」によってふたつの世界とその循環を可視化する内藤の作品に共通した要素といえる。本作と同じ形状・サイズのガラス鏡はこれまで一対で設置され、映し合いによって空間を拡張してきた。

初めて1点で作品化された鏡は、海を望む窓に向けて、高い場所に設置されている。作品の存在は壁面に視認できるが、窓外の自然と光の変化を刻々と映し出しているであろう鏡のなかの像を、鑑賞者は決して見ることはできない。「知っているが知りえないこと」の存在を受けとめ、それらを「生の外」に重ね合わせる。それが「地上の生」とともにあることを、作者は「よろこび」と形容している。

3

地上はどんなところだったか（母型）

2022 [2009]

プリント布、板、塗料

奥行 14.6×幅 16.1×高 6.6 cm

鎌倉館の第2展示室で発表された《地上はどんなところだったか（母型）》は、ガラス

扉から射す自然光のみを光源とし、小さな草花模様の布が床上に敷き詰められた作品である。強制収容所への移送を前にナチスに拘束された子供たちへ、教師が緑色の布を敷いて草原に見立て慰めたエピソードが長く心に残っていたという内藤は、さまざまな大きさの方形に切り分けた同柄の布を部屋の奥から手前へと重ね、始原の海を思わせる空間を出現させた。このときの布を、本作と《恩寵》[no. 7] でふたたび用いている。

布の上に置かれた立体は今回の会場である展示室 3b の空間を模しており、葉山の展示室で本作を見おろす鑑賞者は、「生の外」から「地上の生」を見つめる存在へと変容する。同時に、「布が敷き詰められた展示室」の模型ともいえる本作は、鎌倉館にかつて存在した《地上はどんなところだったか（母型）》をふたたび召喚しながら、新たな体験をひらく作品となっている。

4

帽子

2014–2018 頃

毛糸、糸

直径 1.7×高 1.8 cm

地上の、あるいは生の外の他者に対して「帽子を必要としているのではないか」と心を寄せること、そして、自らが「帽子を受け取っている＝庇護されている」と知りえないこと。小さな白いニットキャップは、2011 年の東日本大震災以後、内藤が無垢の木を刻み、瞳を点描して一体ずつ手がけている人形（ひとがた）のシリーズ〈ひと〉から派生し、2014 年の個展（東京都庭園美術館）で初めて作品化された。

〈ひと〉が他者を思うとき「どこからともなく」帽子が他者に与えられ、同時に気づかぬまま〈ひと〉も帽子を被っていると作者はいう。展示室を模した立体 [no. 3] の上に置かれた《帽子》を見下ろす鑑賞者は、今いる建物の遥か上空から地上の生を見つめる庇護者の視点を獲得する。同時に、自らの頭上の帽子を知りえぬまま、《風船》[no. 5] を捧げられている。

5

風船

2022 (2009-)

空気、風船、糸

直径約 14×高約 18 cm、全高約 512 cm

鎌倉館で発表した《地上はどんなところだったか》では、第1展示室に造り付けられた壁面のガラスケースが作品の構成要素となった。ケースの内側を「地上の生」、外側（通常の室内）を「生の外」の空間と措定し、ふたつの世界に存在するものたちへの慰めや励ましとして、風船のほか布やリボン、照明光、ガラス瓶などさまざまな素材が「飾りつけ」されていた。

風船は、本来の用途がもつ遊びや祝祭の感覚とともに、空気の揺らぎを可視化し、半透明の有機的な球体が生の気韻を連想させる。《地上はどんなところだったか（母型）》[no.3]の上方に設置された本作は、展示室を模した立体の上に浮かぶことで、展示室の空間内にありながら「生の外」に飾られた存在ともなっている。

6

精霊（わたしのそばにいてください）

2009/2022

ボタン

各 直径 2.3×厚 0.2 cm (2点組)

鎌倉館で、テラスと中庭にはさまれた南側階段の石壁に展示された作品。当時の内藤は、準備作業で建物を訪れるたび、中庭に常設されていたイサム・ノグチの《こけし》(1951)に愛着を感じ、鎌倉館の精霊のように感じたという。素材探しの店先で見つけた貝ボタンが《こけし》の顔に見えたことから本作が生まれ、池の方を向いた《こけし》と向かい合うように、「みそ」と呼ばれる大谷石の石目（空洞）に納められた。

内藤にとって、それまで自然の内に求めてきた「精霊」を人形（ひとがた）に見出した

のは、《こけし》と本作が初めてのことだった。「《こけし》の精霊」として見出された本作は、鎌倉館の閉館にともない2016年に葉山館の中庭へ移設された《こけし》と13年ぶりに再会し、山の方を向いて来館者を迎えるその背面を見守っている。タイトルの「わたしのそばにいてください」は、J.S. バッハ『アンナ・アグダレーナ・バッハの音楽帖』所収の歌曲「Bist Du bei mir (あなたがそばにいるならば)」から付けられた。

7

恩寵

2022 (2020-) [2009]

プリント布

縦8×横7.8 cm

鎌倉館の個展で用いた布から切り出された作品。金沢21世紀美術館での個展(2020年)に発表された《恩寵》と同じく、方形の布が上辺のみ壁面に留められている。鑑賞者が息を吹きかけた一瞬に布は浮き上がり、重力からの解放と、内藤が「タマ/アニマ」と呼ぶ生気が空間にもたらされる。[*]

作品の大きさは、鎌倉館で《地上はどんなところだったか(母型)》(第2展示室)とともに展示された《恩寵》(2009/紙にオフセット印刷)にほぼ等しい。進入できない布の床と歩行できる床との境界上に置かれた《恩寵》は、直径7.8 cmの円い薄紙に、裏面から赤い鏡文字で小さく「おいで」と印刷されたギヴアウェイ(手に取って持ち帰れる形式)の作品である。内藤が生誕のイメージとして抱いている、新生児が「生の外」から地上に着地する際の、両足を揃えて収まる円——地上で最初に等しく分け与えられ、一人ひとりが大切に持ち続けて生きていく、それほどの小ささを必要とする人間の孤独を表す空間——の直径を、布の《恩寵》では方形の短辺に変換している。

床上に置かれて鎌倉の記憶を留める《地上はどんなところだったか(母型)》[no. 3]と対照的に、本作の布は水平から垂直に移行し、重力との関係性を異なるかたちで現出させる。スケール感、素材、時間、概念といったさまざまな要素が、複数の作品と場で循環されている。

[※感染症拡大防止のため、本展では鑑賞者が息を吹きかけることを中止しています。]

8

母型

2022 [2009]

水、ガラス瓶

直径 6.7×高 6.6；直径 7.5×高 11.9 cm、全高約 18.5 cm（2点組）

鎌倉館の個展では、池や中庭への眺めをひらく彫刻室の壁際、そしてテラスの手すりに、水を満たした《無題》のガラス瓶が点在していた。

表面張力で盛り上がった水は、重力が懸垂曲線を描くビーズの《恩寵》[no. 1]と同様に、自然現象による美しい造形を生む。

生命を受け取ったことを伝える行為として、自然に向けて「返礼」の水を捧げるガラス瓶の作品を発表してきた内藤は、水を入れた瓶は生者の表象でもあり、空になった瓶に表象される死者——次の生者へとみずからの水＝生命を送り、生をつなぐ存在——あるいは未生の存在によって、生は在るのではないかと考えた。空のガラス瓶を逆さに伏せ、その上に水を入れた瓶を重ね置いたとき、互いの底面を接した二つの瓶が、地中の根とそれが支える地上の植物にみえたという。

生と死の循環を初めて2点組の瓶で構成した本作では、鎌倉館で展示されたガラス瓶に再び水が満たされ、記憶と新生の場へ召喚されている。

9

世界に秘密を送り返す

2022 (2020-)

鏡

各 奥行 7.5×幅 7.5×高 0.5 cm、全高 1 cm（2点組）

《世界に秘密を送り返す》[no. 2] と同じ形状・サイズのガラス鏡が2枚、面合わせを重ねて床上に置かれている。密着した「合わせ鏡」が、極小かつ無限の空間を内部に生み出しているが、外界の私たちがその空間を覗くことはできない。床上の作品を見おろしながら、鑑賞者はガラスの断面に無限の世界を窺い、永遠性の実在を想像することへと導かれている。

現象として目に見えているもの、目には見えないが存在しているもの、見えているけれど見えないものたちが、ともに世界の内に生起していることについて、内藤礼は独自の感性でこれを作品にしてきた。

《恩寵》[no. 1] を機に葉山での展示を検討する年月のなかで、近しいものたちの死、多様な領域において先人たちがなしたこと、それらを後世の人々が伝えてきたことについて思いをめぐらせ、世界に注がれた生のエネルギー、それらが遺したものの、そこから受け取った多くの恩恵を感じた内藤は、テグスやガラス瓶といった「存在を支える存在」の意味を再考したという。

望むと望まざると、それぞれの生を尽くして外の世界へ還った死者が、地上の生をかつて創りあげ、今も生かし支えていること、その尊さ。展示室の入口に掲示した詩は、内藤の思索から最後に生まれた最新の作品であり、未来の展開を予感させるものである。

三本松 倫代（主任学芸員）

[内藤礼からの伝聞は、個展図録（2009 鎌倉；2018 水戸；2020 金沢）所収の解説と、本展準備期間における筆者との会話に基づく。]

下記の展覧会で会場入口（展示ロビー3）に掲示したパネルと閲覧資料の文章をまとめた。出品リストの文言は会場配布物と若干異なる。

コレクション展「内藤 礼 すべて動物は、世界の内にちょうど水の中に水があるように存在している 2022」
2022年10月22日—2023年1月22日 神奈川県立近代美術館 葉山 展示室3b

コレクション展「内藤 礼 すべて動物は、世界の内にちょうど水の中に水があるように存在している 2022」資料
（会場掲示物・出品リスト・展示作品解説）

執筆：内藤 礼、三本松倫代

編集・制作：神奈川県立近代美術館 2022年10月22日